



# 田代一倫写真展 2011-2020

三陸、福島/東京/新潟

2020/9/8[火]—11/1[日] 9:00-21:00

休館日：月曜日(9/21は開館)、9月23日

会場：砂丘館〈観覧無料〉

主催：砂丘館(指定管理者 新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体)

東日本大震災後の東北を歩き  
膨大な市井の人々の肖像を撮影し注目された  
『はまゆりの頃に』から、また現在も撮影が続く  
東京、新潟のシリーズを紹介します。

ギャラリートーク

肯定する肖像 10/11[日]14:00-15:30

田代一倫＋聞き手：大倉 宏(砂丘館館長)

定員：15名/参加料：500円/砂丘館へ要申込(受付開始9/9)

## ホームと人

大倉 宏

本展では写真家田代一倫の「三陸、福島」「東京」「新潟」という3つの場所で撮影された肖像写真のシリーズを紹介する。

「三陸、福島」シリーズは田代の写真集『はまゆりの頃に 三陸、福島 2011～2013年』（里山社 以下『はまゆりの頃に』）に掲載されたものの一部である。

私が感動し、しばしば新潟を訪れてきていた田代一倫に展示を依頼するきっかけとなったこの写真集は、2011年春から2013年春にかけて、地震や原発事故で被災した地域を含む東北の太平洋側を訪れて撮影した453枚のポートレートで編まれている。しかし災害に直接、間接につながる人だけではなく学生、工場主、デパートの買い物客、神社の初詣客、工事現場の作業員、コンビニの店員、町のホストやスナックで働く女、タクシーの運転手、僧侶、会社員、畑仕事をする人などさまざまな人が登場する。年齢も子供から高齢者にまでおよぶ。一貫するのは人を正面から、目を合わせて撮るという方法で、かならず場所の光景が写し込まれる。災害は写真家に意識されてはいるが、撮影にあたっては、同時にそれを意識しまいともしているように見える。

この撮影スタイルは九州北部と韓国南部を撮影地とした「樺の街」、日韓の国境近くにある島で撮影された「ウルルンド」、現在も続けられている東京のシリーズにも共通する。『はまゆりの頃に』はこうした「方法」をすでに確立した写真家が、被災地を訪れ、取材し、上梓した一冊とすることができるだろう。撮影の動機について田代は「テレビで避難所の映像を見て、インタビューに答えていない人の方の生活が気になったからです」と写真評論家の倉石信乃との対談で語っている。<sup>\*</sup>

この本が興味深いのは、被災した人や震災という事件以上に、震災とのつながりが薄い、あるいは無いとさえ言いたくなる人や

ものやことが、少なからず写され、書かれていることで、全体の情報量として見ればむしろ後者が前者を凌駕している。さらには写真家がそこで感じたであろう戸惑いや落ち込み、不安などが、人々の生き生きとした表情やさりげない言葉から、逆照射されるように感じられてくることも印象に残る。それと関連して、写された人と場所の親和感にも注意を引かれる。

田代さんの写真に写された人々には…「ホーム」にいる人間の感じがあります。そこへ写真というアウェイからのそよ風がずっと吹いてくる。そこに人は顔や目を向けるけれど、でも気分や体はホームにいる状態のまま、その＜ホーム／アウェイ＞の二重性の「混合比率」に、ほかの肖像写真とは違った、非常に独特のものがあります。

これは今回の展示の候補作として、田代が新潟で撮った数十枚の画像を送ってきたときに私が思わずメールで返した感想だ。私が新潟在住であるために、田代の写真の人と場所の近さ＝「ホーム」の感じがより強く意識されたのだろう。それは三陸や福島の人が『はまゆりの頃に』に、ウルルンドの島民たちが写真集『ウルルンド』（KULA）に感じることでもあるのではないだろうかとも思う。

田代の撮影現場を目撃したことのある倉石信乃は「ジェントルマンとして声をかけるんですが、かなり喰らいついて撮るんですね。細心に相手との距離を測りながら、非常に礼儀正しく接しながらも、自分が撮りたい写真については容赦しないという、二つの面があるようにその時感じました」と証言している\*\*が、この二面は『はまゆりの頃に』にも伺え、前者についていえば敬語や謙譲語で貫かれているコメントにも表れている。ジェントルマンであるということは、距離を見失わないということで、その距離を介して写真は相手を、相手は写真家を、撮る／撮られる時間のなかで見つ

め合う。その相手の目に映るのは写真家であると同時に、その時の前後を通じてたちあられる人であり、その人に向かって被写体たちはどこかいたわるような素振りさえ示しているように見えるのが、興味深い。

「何で撮りたいのか、説明して下さい」私が撮影したい理由を話すと、「いいですよ」と、快くモデルになってくれました。

山と集落と田んぼを背に撮影された少女の写真に添えられた言葉だが、彼女が納得したのは説明それ自体というより、説明する人が大人の格好をしながら、どこか幼児に似た、気遣ってあげるべき相手であるような気配を漂わせていたからだったのではないかと笑顔が感じさせる。その気配、あるいは立ち居ふるまいは、写真撮影のための手段というより、もっと田代一倫という人間の本質に深く根ざすものであるようだ。

『はまゆりの頃に』の巻末にこんなエピソードが開陳されている。2013年の正月、震災以来2年ぶりに初詣が行われ、仮設住宅や引越越し先から来た参拝客と報道陣で溢れていた福島県南相馬市の小高神社を田代は訪れる。

カウントダウンが終わり、地元に住んでいた皆さんのお参りが始まると、取材のための照明で辺りが一気に明るくなりました。境内に上がる階段の上から、お参りする方と対面するようにたくさんのカメラが回っているのを見て、私は参拝の列の遥か後ろから、何枚か撮影しました。

その翌々日、宿泊先にあった朝刊を何気なく開くと、初詣の様子を写した写真が大きく掲載されていました。その写真をよく見ると、参拝される方々の後ろに、怪しいカメラマンである私の輪郭がぼんやりと写っていました。人々の生活の中に侵入した「異

物」である自分を、私は初めてこの目で確認し、暗い気持ちになりました。しかし次第に、それこそが、自分が写真を撮りに行く価値なのかもしれないと思うようになりました。

東北にあって自分はどこまでも「よそのもの」でしかない。ならば光を当て、事件を取材する側に行けば場所は見つかる、だが、そこへは行けない。行けないこと、ただただ戸惑うしかない場所に立つことが「自分が写真を撮りに行く価値なのかもしれない」と思う。田代一倫のなかのこの弱さ（惑い）と強さ（自意識）の混合比率は、文字通り、独特である。

深く惑いながら、喰らい付いてくる写真家の前で、撮られることに同意した人たちは、なぜかしらみな、どこか「晴れがましい」表情を浮かべている。

何にたいしての晴れがましさなのか、知らないまま誰もがそれを開く。そのようにして人は、よそのものである写真家の目の戸を内に引き、居場所／ホームへと写真を見る者を招いているように見える。

ところで三陸、福島の写真後の2014年から始められ、現在も継続する東京のシリーズは、撮影方法は変わらないものの、『はまゆりの頃に』『ウルルンド』とはどこか違う印象を与える。うまくは言えないが、一人一人がより孤独に見える。東北やウルルンドや新潟と、そこにいる人間の居場所との関係が、東京ではどこか、どうも、違っているのではないだろうか。

東京という場所が、また新型コロナウイルス感染拡大という事態が、撮影者をさらに戸惑わせ、強固と思える撮影方法まで揺らしだしているようだ。

<sup>[1]</sup> \*NEONEO 特別企画 対談「東京・TOKYO 日本の新進作家 vol.13」より 田代一倫(写真家)×倉石信乃(写真評論家)～いま肖像写真を撮ること～ http://webneo.org/archives/41493

<sup>[2]</sup> \*\*同





2018年10月11日 新潟市



2017年5月7日 新潟県佐渡市下久知



2016年5月3日 新潟市中央区



| はまゆりの頃に



2011年4月23日 岩手県宮古市老田中

「震災を思い出すので、直後はなかなか自分の家に戻ることができなかった」  
自宅跡に探し物をしにきた女性です。高価なものではなくても、自分にとって大切な物を探す  
方々と対面すると、物に対する人の価値観を改めて考え直します。

| 「東京」2014-2020



2012年7月24日 岩手県大船渡市赤崎町蛸ノ浦

「オレンジ色がはまゆり、白がやまゆり。あれ？逆か？」  
家で鉢植えにするために、花を抜いて来たという男性です。海辺の崖に咲くはまゆりと、山に  
咲くと言われているやまゆり。両方を一気に持って帰れることを、私は羨ましく思いました。



2016年4月6日 渋谷区恵比寿



2020年2月3日 新宿区新宿

新潟を初めて訪れたのは、2015年5月の連休、新潟水俣病によって亡くなられた人々を追悼する「追悼集会」に参加するためだ。映画『阿賀に生きる』を監督した佐藤真さんについての書籍を妻が出版するとのことで、ついて来た。

会場の安田公民館は不思議な雰囲気だった。「さんじさん」と呼ばれるおじさんが甲高い声で歌っている。私はそれに引き込まれ、子供のように最前列まで行き、彼の姿を見ていた。後に、『阿賀の記憶』を見て、彼が水俣病患者の渡辺参治さん(7月2日没 104歳)であることに気づいた。

その集会の企画、進行をするのは、<冥土のみやげ企画>の旗野秀人さんだ。これも後に、旗野さんが、いかに水俣病患者の方々のために奔走してきたのか、その一部を少しずつ知るようになるが、とにかく、毎年開催されるこの集会へ参加する方々の個性豊かな存在だけを見ても、旗野さんの懐の深さが良くわかる。

その年から、追悼集会でない用事でも、毎年新潟を訪れている。砂丘館で見たかった作家の展示やイベントなどを楽しみつつ、新潟の風土を堪能する。写真家としては、まるで緊張感のない滞りで、日記のように写真を撮影していた。その時は、新潟で撮った写真を展示するなんて、思ってもみなかった。

砂丘館から松林を抜けて日本海に出る散歩は、いつでも穏やかな解放感があるし、中央区に点在する古い街並みでおばあさんと話していると、なぜか懐かしい気分になる。また、市内から阿賀に向かう道中に見る稲作の風景は、時間が何百年も巻き戻ったかのように美しい。また、住民による投票で原発施設設置を退けた旧巻町の不思議な佇まいに、新潟の奥深さを知る。そして、佐渡島は、それらの魅力がさらに凝縮した島だった。

阿賀の風土を感じ、旗野さんのことをゆっくりと体感しながら知っていくように、新潟では、人に会い、土地を知る。あるいは、人を知り、土地に会う。その繰り返しだった。

写真家として撮影しようとするれば、年に数回通わないといけないと思うし、魅力に感じている土地も見え方が変わってしまうかもしれない。何よりも、一直線にしかものを考えられない私は、作品にする過程で関わった方を傷つけてしまうかもしれない。だから、中途半端な覚悟しか持てない私は、新潟の素晴らしさを享受するだけの無責任な観光客のままにいる。

田代一倫(たしろ かずとも):1980年福岡県生まれ。九州産業大学卒業。2006年より、福岡市にて、写真家自身で運営するギャラリー〈アジア フォトグラファーズ ギャラリー〉の設立、運営に参加。2010年に活動の拠点を東京、新宿にある〈photographer's gallery〉に移して活動している。2013年に写真集『はまゆりの頃に 三陸、福島 2011~2013年』(里山社)、2017年に写真集『ウルルンド』(KULA)を出版。同年さがみはら写真新人奨励賞を受賞。2014年「これからの写真」(愛知県美術館)、2016年「歴史する! Doing history!」(福岡市美術館)、2017年「東京・TOKYO 日本の新進作家vol.13」(東京都写真美術館)、2018年「近くへの遠回り」(ウィフレッド・ラム現代美術センター、キューバ)に出品。



## 砂丘館

旧日本銀行新潟支店跡地

指定管理者:新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体

新潟市中央区西大畑町5218-1 tel.025-222-2676  
E-mail sakyukan@bz03.plala.or.jp

新潟駅万代口より浜浦町線C2系統又は観光循環バス「西大畑坂上」下車徒歩1分  
砂丘館には駐車場がありません。また、周辺の道路は駐車禁止です。公共交通機関をご利用ください。  
新潟市西堀地下駐車場をご利用の方は駐車券提示にて1時間分の無料券を差し上げます。

私たちは砂丘館の自主事業を応援しています。

画堂ありれ株式会社

NSGグループ

ISHIKAWA

新潟ビルサービス

丸屋本店

藤田金属

WIND

郷土の文化に親しむ会